全カリ News Letter
No.17
2002.11.30
立教大学全学共通
カリキュラム運営センター

鼎　談

よりよい授業運営を目指して

～　大人数授業・成績共有・ＦＤ推進をめぐって　～

庄司　洋子　全学共通カリキュラム運営センター部長
前田　英樹　文学部長、全学ＦＤ検討委員会座長
疋田　康行　教務部長

＜全カリの取り組みと今後の課題＞

庄司　洋子

○**庄司**　今年度、全カリ部長として２期目を迎えることになりました。私が３人目の全カリ部長としてやってきて、１期目に進んだことがいくつかあります。全カリは、課題をいくら解決しても常に新たに湧いてくるというところがあって、そういった課題をうまく取り込みながら、新しいことを随分やってきたと思います。

１つは、総合教育科目の中に「多彩な科目」＜立教（R）科目と時事（T）科目＞と、国際センターの要請を受けた「英語による日本研究（F）科目」を新たに作りました。やはり全カリは、そのときどきの要請に応じた弾力的な発展を遂げられるような作り方をしていると思いますが、そういう入れ物があって、そこに実際に中身を入れて充実させるということは大変意味あることだと思います。

それから、もう１つは、「科目シラバス（科目定義）」を整備したということ。やはり同じ科目名称の中で、複数の先生が担当しておられるときに、あまり自由にやっていただいても困るので、こちらの科目のねらいをはっきりお示ししておくというのは、あまりきつく縛ってはいけないと思いますが、やはり大事なことだと思います。

それから、全学的な関係でいうと、「f-Campus」や立教女学院短大、聖路加看護大学との交流が進み、他大の学生から見た全カリ科目の評価というのが得られるようになってきたということ。そのことは、全カリの１つの長所でもあると思います。その関係で、今回話題にしたいＦＤ（＊1）との接点が随分出てきていると思います。

特にまた「ＦＤ」との関係でいうと、去年実施した総合のワークショップは非常に中身が濃いものでした。「大学教育研究フォーラム」にもそのワークショップの記録が残されていますが、そこで総合の授業を担当された各学部の先生方がきちんとした報告をしてくださって、私自身のＦＤにもたいへん参考になりました。ですから、このようなものを教材にして、ＦＤの展開を図っていけるのではないかと感じています。

そして、２期目に入り、自分なりにいくつかの取り組むべき課題を設定しています。

ひとつは、「大人数授業」について。これについては、法学部・経済学部では、もうすでにかなり議論が進んでいると思います。専門学部と共通する課題と、全カリに固有の課題というのをはっきりさせながら、どのようにこの課題に取り組んでいくか、これから大学が問われるところです。文学部や理学部から見れば、大人数授業の問題がピンとこないという面はあると思いますが、それらの学部の先生方も、全カリの授業を担当してくだされば、また体感してもらえるのではないかと思います。そのことについて今日はぜひ、先生方と意見交換ができたらと思っています。

目　次

鼎　談……庄司洋子、前田英樹、疋田康行（1～5）
人文科学教育研究室出張報告……弘末雅士（6）
2002年度全カリ運営センター名簿 ……（7）
全カリ運営センターNEWS……（8）

それから、「成績情報の共有」について。これはやはり、経済学部や法学部とかなり接点のあるテーマになっていますね。というのは、今年初めて全カリは、総合教育科目について成績情報の共有を制度化することになり、当然ですがいろいろなリアクションがありました。これについても、先生方からどのような反応があるのか、どんな了解がなされているのか、あるいは、それをやることによってどういう成果があるのか、という点について先行の経済学部や法学部に学びながら、その中で全カリは何を独自の課題にしていくか、を考えています。

最後に、「ＦＤ」については全学的に重要な課題となっていますが、これについてもお考えを伺って、全カリといろいろすり合わせをしていきたいと思っています。

正田　康行

○**正田**　まず大人数授業の話ですが、私は経済学部の教授で、ある程度大人数の経験もあります。経済学部での大人数授業への取り組みは、確かに非常に大きな課題で、すでに必修ないし準必修科目については、当初は学科別に、さらに今では１教室 200 人ぐらいの規模で授業を実施するようになってきています。

それと成績情報の共有ですが、経済学部では、教授会と非常勤講師懇談会で、前年度のＡＢＣＤの比率と、履修者数と受講者数というのも合わせて公開していくことを実施してからかなりの時間がたっています。

その効果がその後少しずつは出てきていますけれども、そこで、ようやく全学教務委員会やＦＤ委員会で、こういう大人数教育そのものはＦＤではないかもしれないけれど、そういうものを展開する基盤的な条件だ、という全学的な同意が少しずつ進んできたなと思っています。

○**庄司**　経済学部では、大人数授業と成績情報の共有というのは、問題として関連があって、こういう取り組みになったわけですか？

○**正田**　はい。必修の授業ではそうです。専任の教員で、履修者数が何人ぐらいで、それでこの成績分布だというと、だいたい評価の分布の妥当性についてわかるわけですよ。こういう情報が公開されていれば、不自然な評価は自ずからある程度は改善されていくようにはなっているんですね。やはり、授業、教育に対する姿勢を、いろいろな状況の中で正していくような仕組みであるわけです。

○**庄司**　特に、成績情報を共有するというのは、単純な情報公開ではなくて、共有というところに意味があって、人はどうで自分がどうで、全体としてはどういうふうにお互いに責任を持ち合っているのかということについて考えさせられるわけで、やはり極めてＦＤ的な発想から来ているんですよね。

前田　英樹

○**前田**　僕は、文学部の教員だから、大人数教育は…。

○**庄司**　一番ピンと来ないでしょう。

○**前田**　大人数授業がなぜ生じるのかという問題がそもそもありますが、単に教員配置の問題ではなくて、授業のやり方が大人数になる要因になっているとしたら、これはやはり大問題だと思う。私の実感だと、教育効果ということが言えるのは、せいぜい 200 人以内の授業であって、それ超えたらこれはもうモラルの問題ですよ。それは、学生にどれだけ失望感とか、大学に対する不信感を与えているかということを、もっとよく知るべきだと思います。

それから、成績情報の共有ということですが、今、一番問題なのは、大学の成績評価が社会的に何の権威もないということですね。こんな状態だったら、企業は大学の偏差値的な序列は利用するけれども、大学が中で行っている教育とか、それに対する評価とかというのは、何も信用していないということでしょう。大学がこれを放っておくというのは、やはりこれは大学のモラルとしておかしいんですよ。学費を取って授業しているのであれば、それだけの付加価値を学生に与える。その付加価値が社会的に権威のあるものだというようにしていかなければ。そのためには、教員同士が、評価とは何かということを真剣に考えなければいけないし、そのための情報を共有し合う、それから、評価基準というものを絶えず議論しあって共有しあうということが、一番基本的なことだと思います。

＜成績をつけるということ＞

○**庄司**　評価についてあまり議論をしたくない先生方も多いと思います。しかし、やはり、評価とは何かということを根本から問い直すことは、すごくいいことだと思います。というのは、私自身の経験で、きちんと授業

をしていないと、試験問題すら作れないし、評価をする気がおきない。きちんとねらいを持って、本当にエネルギーを注いではじめて、どういうふうに理解されたんだろうかとか、そういう気になれるけれど、それをやらなかったら評価には向き合えない。だから、評価というテーマと向き合えるかどうかということを自問することは、私はすごく重要だと思います。

○**前田**　評価から逃げないことですね。大学の評価は、そもそも達成度評価でしょう。達成度評価を行うということは、自分の授業が何を達成するのかっていうのがはっきりしていないと駄目でしょう。それをはっきりさせられないと、いつまでたっても評価から逃げてしまう。これこれのことがわかるようになったとか、何か使用可能なものが身についたとか、学生が実感を持ちうることですよね。それはとても難しくて苦しいことだけど、そうでないと、大学はこれから社会的に成り立っていくことができないと思います。

○**庄司**　理学部の場合は、何の力がついたかというのがわかりやすいけれども、文系は評価が難しいという話があります。しかし、文系でもやはり何かの力はついていると思います。大学とはそもそも何なのか、大学が教える知とは何なのか、そういうことを議論する入り口として、この評価の問題というのを取り上げてみると、すごくある意味で逆説的で面白いですね。

成績情報の共有というのは、要するに、お互いにどういう評価をしているかということを共有しようということですが、そのことと大人数授業とがリンクしているというのはすごく重要ではないかと思います。そういう今まであまり直接向き合いたくない問題に向き合うことにしました、という宣言ですよね。単純なことだと思いますが、一定の限度を超えたら評価はできないのではないか。1 人の人間が、どうやって 500 人を超える人を評価するんですか。

ですから、責任ある授業運営とか、成績評価とか、それが成り立たないような状況にある現実に向き合うってことは、すごいことだと思うのです。

○**疋田**　30 年ぐらい前に、いわゆる大学闘争というのが起きたときの根っこの１つには評価の問題があったと思います。それから随分たっているのに、この問題への取り組みは遅々としたものだったというのを、やはり強く感じますよね。

成績をつけるということは、教師の立場からすると、自分で自分を評価するわけですよ。こういう授業を、学生にこうやって、その成果が学生の能力として出てくるわけですから。だから、いつも学年末の試験では、成績を見ると落ち込むんですけどね。これだけ努力してこういう工夫をしてみたけど、やはりこの程度か、とかね。

やはり機械が教えるのと違って、生の学生に生の人間が教えるのは、毎年学生も変わるし、１年の間でもいろいろな条件が少しずつ変わってくる。それに合わせて最適な情報の提供や、考える材料を提供しなければならない。常に緊張を強いられる仕事ですが、なかなか腕が上がらなくて（笑)、いつも悩んでいます。

ただもう１つ、成績を開示する、共有することの他に、お互いの授業の分業の問題がありますね。つまり、私のやっている授業は、他の授業の内容を前提として成り立っているところがある。ですから、自分の授業の前提としている部分が、ほかの科目でちゃんとやられているかどうか。このリンケージもまた問題になるのではないかと思います。

○**庄司**　シラバスなどに授業の内容が提示されるようになって、学生が助かるだけではなくて、教員同士でもお互いの授業がよくわかるようになりましたね。

○**前田**　教育内容自体も、教員間で絶えず開示されていればいいわけで、ゆくゆくは、歴史的にいったら、人文とか社会、自然っていう分野のカテゴリーが、だんだん溶けていくと思いますね。そのときに、時代を引っ張っていけるような人材を、大学はつくらなければいけないし、そのときに様々な分野を横断する力を持っている学生を育てていかなければならない。

○**疋田**　そうですね。ミクロとマクロの世界に関心を持って、自分とつなげて理解しようという姿勢のある学生を育てていく。しかし、人間は、実際には、オールマイティにできるわけはないから、私はここが得意になって大学を出ましたというものがあって、それで社会でも評価を受ける。そういう分野が１つでもあれば、人間は自信を持って、そのほかに身についた能力をそれと結合して発揮していきますからね。その自信を持つところを、あまり全部って要求しないで、いくつか持てばいいのではないかと思います。

＜学生による授業評価＞

○**疋田**　今の学生は何でもなく見えますけれど、しかし、随分、深いところで失望感を持っていると思います。経済学部は、授業にかかわる評価をしてきましたが、それははっきり出ます。やはり単位が欲しいから、いわゆる

「楽勝科目」を取りますけれども、その教員を別に尊敬してはいません。教員の不用意な一言で、本当に学習意欲をなくしてしまう。１年生の基礎演習のような小さなところでも、教員が相手のことを考えないで、あるいは、一方的な思い込みで話をするということで、失敗する例も随分あります。結局は、教員の人生経験や人間に対して、どのように考え、接しようとしているかというものが直接に出ますよね。

学生による授業評価については、学生集団は一応信頼できると経験的にわかっていますけども、それらをＦＤの材料とか、授業改善のために積極的にどう使っていくか、考えていかなければなりません。本当に、問題を指摘された場合に覚悟ができているかどうか。いろいろな問題が出てきたら、大学側としても責任を持って、別途に調査して対応していくことが必要ですからね。

○**前田**　そうですね。学生は、教員を一人の人間として見ますから、その人間が他人とどんなふうに向き合うかっていうことを、よく見ていると思います。われわれのやり方１つで、彼らの失望が、人間そのものに対する失望になるし、社会そのものに対する失望になると思います。そこのところを、私たちはよくよく考える必要がありますね。

○**庄司**　全カリの経験で言うと、学生部の行っている「大学環境調査」などでは、全カリに対する評価が非常にシャープに出ていて、私たちはそれなりに満足感があります。ああいうのを見ていると、学生は素直にきちんと反応する力を持っているんだな、と思います。ですから、きちんとしたアンケートの手法というのがあるべきだし、それから、大学側が学生にきちんと向き合っているということが伝わっている中でアンケートが行われれば、厳しく反応するところはするし、評価するところは評価する。そのぐらい学生への信頼を持ってもいいのではないかと、私は思います。

○**前田**　しかし、大学教育の難しいところは、そのときに何だかよくわからなくても、一生かかってわかってくるような授業もあるので、そこをまた、どのように読むかですよね。

○**庄司**　それで、単なる人気投票みたいな形をやると、わりとはっきり結果が出るわけだけれど、だからといってその科目や授業、先生がいいのだということには、単純にはならないですね。ですから、アンケートの作り方というのは、ものすごく重要です。

私は、アメリカの大学院で、学生が作ったかなりしっかりとしたアンケートを見たことがあります。自分もそれを参考にして、履修したこともあるのですが、20 項目ぐらいきちんと聞いていてやはりすごいですね。その中の１つに、声が明瞭で、メリハリがあって学生を引きつける能力がある、とかね。痛いところをきちんと突かれていますね。授業の準備が非常によくできている、とかね（笑）。それから、やはり学生の理解を助けるための資料や何かを準備しているとか、本当にサービス精神をもってやっているとか、いっぱい挙げられているけれど、そういったことを本当にきちんとこちらが自信を持ってやれるのであれば、それはかなり正直に出るでしょう。しかし、先ほどの成績評価と同じで、こちらに自信がない状況の中で、アンケートをすると相当大変なことになるのではないかと思います。自分がやっていることに応じてしか、学生に対してはやれない、ということをこちらが胸に手を当ててよく考えなければならないのではないでしょうか。やはりそこから始まるという感じがします。

＜教育環境の整備＞

○**庄司**　今回、人数の関係で、講堂であるタッカーホールを教室として使っている全カリの授業があり、いろいろ支障が生じています。経済も使っていますね。

○**疋田**　経済学部も法学部も使っています。

○**庄司**　それは、やはり問題でしょう？本来教室ではないところを、教室として使わなければいけない。そういう意味では、全カリでは、いろいろスローガンは言っていても、実際に授業をおこなう条件はどうなのかと問われますよね。私の経験でも、以前の４号館の３階の西日が当たる暑い教室で、冷房もなく、こちらも汗だく、学生も汗だくで、いくらがんばって授業をやっても、どうしてもおしゃべりが多くなる。そういう中では本当にお互い集中できない。それが、新しく７号館ができて、同じ授業を設備の整った教室でおこなったら、本当に静かなんですよ。

○**前田**　そう。条件を整備しないと。

○**庄司**　ですから、もっと単純に言うと、本当に学生が尊重されているか、というレベルのことでしょう。議論の余地のないレベルで、ＦＤ以前の問題として、授業環境の整備というのがまずありますね。

○**疋田**　経済学部教員ではなくて、教務部長の立場に戻ると、やはり教室の問題は大きな課題ですね。これは、教務部だけでできることではないですけれども、教室の

環境や数について、こういう状態ですと、毎年きちんと調査していく。そして、そういう基本情報を教務委員会が確認をしながらやっていくということは大切です。そして、環境が整ったうえで、はじめて教育効果はどうだとか、成績調査についても議論ができるのではないでしょうか。教務部が、こういう情報を出していくということが、やはりＦＤを進めていく基本的な力になっていくだろうと思います。そのような雰囲気を作っていく必要性を認識させるという意味では、教務部の仕事は結構多いのではないかと思っています。

＜ＦＤ、授業改善への取り組み＞

○**前田**　私は今、ＦＤ検討委員会の座長をしていますが、世間でＦＤとかいうのをやっているから、われわれも何とか調子を合わせなければいけないとか、そういう外圧によって動かされているような気がします。本当にそういうことではどうしようもない。ＦＤという言葉は別になくてもいいので、われわれ自身が自発的に大学における授業運営に責任をとっていかなければいけないですね。

○**庄司**　しかし、実際には、f-Campus などで他の大学の学生の状況を知らされたり、改めて他の大学のシステムを調べてみたりということで、外からの刺激による気づきは随分と大きかったですね。

○**疋田**　私も、文部科学省が進めている枠組みの中でやっている感じがします。しかし、ＦＤというものは、本来は、教員職員ともに、大学で働く者のプロ意識というか、職業意識で動いていくものです。全部は無理でも、１つでも２つでも教育効果の上で政府推奨のものを超えられるシステムとか成果を作っていきたいですね。

○**前田**　そうですね。

○**庄司**　たとえば、ＧＰＡ制度（＊2）なども、学生のやる気を促すものである一方で、学生の過剰な履修傾向を抑制するような働きもあり、両面を持っていますよね。しかし、それをもとに、大学が主体的に、様々な授業改善の方策が実際に使えるものかどうか、といった議論をきちんとしていくことになるのではないですか。

○**疋田**　そういう意味では、授業改善のためのいくつかの方策について、いろいろな要素の組み合わせをもっと意識的にやっていく必要があると思います。これも、言われたからやるのではなくて、こういう組み合わせだとこういう効果が予測されるという進め方で行きたいですね。自分はどこの大学でも通用する教員で、授業を一生懸命やるんだ、というプロ意識を持っている人たちが、一緒にやっていけるものを考えていくことが必要ではないでしょうか。

○**前田**　そうですね。教員は、授業をやることが一番疲れるっていうのでなければ駄目ですよね。会議の専門家ではないから、会議でミスしてもそれほど責任はないんですよ（笑）。ところが、授業でばかなことやるということは、これはやはりプロとして恥ずかしい。いい授業をするために必要なことをやるということ、実はそれが私たち教員にとって、一番大変な骨の折れることでなければならないはずです。

○**庄司**　今日は、全カリの今後の課題について、同時に、それらは全学的な課題でもあるわけですが、有意義なご意見をいただきありがとうございました。各学部、また教務部をはじめとする事務部局とも協力をしつつ、よりよい全カリをつくっていきたいと思います。どうぞ今後ともよろしくお願いいたします。

＊1　ＦＤ（Faculty Development）

「教員の教授内容・方法の改善への取り組み」のことで、大学審議会の答申の中で、大学教育改善の基本的な柱として積極的な推進が進められている。

本学では、「教育向上に向けた組織的な支援活動の意味で、教育方針を具現化するためのしくみ作りの総体である」と位置付けられている。

＊2　ＧＰＡ（Grade Point Average）制度

現在のアメリカの大学で、一般的に用いられている学生の成績評価システム。アメリカで最も多く使われているのは、ＡＢＣＤＦランク法で、各ランクそれぞれに特定の数値（ＧＰ；グレード・ポイント：通常は、Ａ＝４、Ｂ＝３、Ｃ＝２、Ｄ＝１、Ｆ＝０）を与え、学期ごとに、学生の個々の履修科目のＧＰにその科目の単位数をかけ、その総和を履修登録科目の総単位数で割ってＧＰＡを算出する。

ＧＰＡの計算では、学生が履修登録したすべての科目の合計単位数を分母とするため、登録した科目を履修しないとＧＰＡを下げることになり、アメリカでは登録したが履修の意思がない科目については、登録を取り消す手続きを取る。

アメリカの大学においてＧＰＡは、個々の学生の総体的な学業成績の目安として使われると同時に、学生が登録した科目は責任をもって履修するという、学生によるコミットメントを要求する制度としても機能している。

現在、日本の大学でも、教育改革の一端としてＧＰＡ制度を導入する大学が増えつつある。

人文科学教育研究室出張報告

人文科学教育研究室主任
弘末　雅士

「紛争地の人権」という時事科目を昨年度から担当している報告者は、国家建設のために自らの命すら賭して独立闘争を展開しながら、いったん独立を達成するとその国民統合を維持するために、他地域に侵入し、その障害となる存在を抹消する行動がしばしば生じることを、どう考えたらいいのか頭を悩ませている。200 前後の国民国家で形成されたこの国際社会には、民族あるいはエスニシティを基盤とする国家づくりの思想が根強く存在する。人間の生と死を自然や祖国と結びつけて永遠化をはかる国民国家は、時として人々を国家のために死に追いやるし、また国家の営みを阻もうとする存在の生存は必ずしも保障しない。

一方テロ問題が浮上している現在の国際社会は、人間の生と同時に死にも関心を払わざるを得なくなっている。東西冷戦が終焉を迎えた 1980 年代より、国際政治では「人権」が、最も重視される論点となった。人が生きるために保障されるべき権利のことである。この権利をめぐって多様な解釈と論議が展開されてきた。ただ、「生きるため」の対極の「死」については、「不当な死」を問題とするか安楽死をめぐって議論する以外は、必ずしも十分に論議されていなかったように思われる。

今回の出張で考えてみたかったことは、人の生と死を人権問題としていかに総合的にとらえるかということであった。このため、阪神・淡路大震災を体験し、また患者の生と死に常に向き合うことを職業とする看護士・看護婦を養成する神戸市看護大学を訪問させていただいた。

これまで病院が主な働く場であった看護職が、病院だけでなくたとえば自宅での療養や自宅で死を願う人々のために活動するなど、かなり多様な場へと広がっていることを教えていただいた。このためカリキュラムには、専門科目とともに基礎科目として医療・家族と法、医療人類学、生態学などの人間を多面的に理解するための科目を設けているとのことであった。

また阪神・淡路大震災の痛手から立ち直ろうとする人たちの心身の健康のために、様々な取り組みがなされていることをうかがった。カリキュラムにおいても専門科目のなかに災害システム論や地域看護援助論などを設けて、この問題に取り組もうとしている。1996 年神戸市西区の学園都市に誕生したこの大学は、当初より地域に生きる人々の全体的営みのなかでの看護活動の意義を探ってきたのであった。

学生のほとんどが神戸市およびその周辺地域の出身者よりなるという。おそらく彼らの多くが、阪神・淡路大震災を体験したことと思う。私はかつてこの大震災を体験したある友人から、地震がしたとき体がベッドから空中に投げ上げられ、その瞬間に「ああ死にたくない」ということだけが頭に浮かんだという話を聞かされたことがある。ごく自然な人間の心の反応であろう。生きる上でほかにもっと重要なことがあると思うようになったその友人は、それ以来学問研究に以前ほど情熱を見いだせなくなったと語ってくれた。

人は生死の境目を体験すると、たまたま生きていることを真剣にとらえ直そうとする。おそらく神戸市看護大学で学ぶ学生諸君のなかにも、そうした体験を持つ人たちが少なからずおられるであろう。また他方で人は、偶発的な死も望まない。どうしても避けられぬ死の場合、これを真剣に受け止めようとする。おそらく境目を体験することにより、ひとそれぞれの生と死の考え方が見直されるのであろう。

死を正当化する論理にたいして、「人権」は苦しい格闘を強いられる。「不当な死」を人々にもたらす事態を、問題とするべきことはいうまでもないが、他方で命を賭す論理と「人権」とはなかなか議論がからまない。死ぬための思想とは、性格を異にするからである。そしてこの命がけの信条が、状況が変わると、自らの前に立ちはだかる存在を抹殺しても仕方がないとする論理にもしばしば転化していくように思われる。生死の境目を体験することによって得られた死生観とか、なにかしら両者を媒介できる議論が必要になるのではないだろうか。美しい看護大学のキャンパスを見せてもらいながら、そんなことを考えさせられた出張であった。

２００２年度　全学共通カリキュラム運営センターメンバー一覧

【運営委員会】

	氏　　名	所属	小委
部　　長	庄司　洋子 (ショウジ　ヨウコ)	社社	
部 会 長	山本　博聖 (ヤマモト　ヒロマサ)	理物	言語
☆	名和　隆央 (ナワ　タカオ)	経経	総合
学部選出☆	蒲池　美鶴 (カマチ　ミツル)	文英	言語
☆	藤井　淑禎 (フジイ　ヒデタダ)	文日	総合
☆	奥村　和久 (オクムラ　カズヒサ)	経経	言語
☆	菅沼　　隆 (スガヌマ　タカシ)	経経	総合
☆	河村富士夫 (カワムラ　フジオ)	理生	言語
	比嘉　達夫 (ヒガ　タツオ)	理数	総合
	山口　和範 (ヤマグチ　カズノリ)	社産	言語
☆	是永　　論 (コレナガ　ロン)	社社	総合
☆	舟田　正之 (フナダ　マサユキ)	法法	言語
☆	高原　明生 (タカハラ　アキオ)	法政	総合
	林　　脩平 (ハヤシ　シュウヘイ)	観	言語
☆	大橋　健一 (オオハシ　ケンイチ)	観	総合
☆	浅井　春夫 (アサイ　ハルオ)	コミ福	言語
	林　もも子 (ハヤシ　モモコ)	コミ福	総合
専門委員☆	原　　克 (ハラ　カツミ)	文独	言語
☆	一ノ瀬和夫 (イチノセ　カズオ)	経経	言語
	坂倉　裕治 (サカクラ　ユウジ)	文教	総合
☆	佐々木卓也 (ササキ　タクヤ)	法政	総合

[総合構想小委員会]

名和隆央、藤井淑禎、菅沼　隆、
比嘉達夫、是永　論、高原明生、
大橋健一、林もも子、坂倉裕治、
佐々木卓也

〔言語構想小委員会〕

山本博聖、蒲池美鶴、奥村和久、
河村富士夫、山口和範、舟田正之、
林　脩平、浅井春夫、原　　克、
一ノ瀬和夫

☆印は 2002 年度新任

【総合教育科目担当部会】
部会長：名和　隆央

研究室名		氏　名	所属
人文科学	主任☆	弘末　雅士	文史
	☆	市川　　誠	文キ
		木寺　廉太	文キ
	☆	小嶋菜温子	文日
		星野　宏美	文独
		佐々木一也	文教
	☆	三浦　雅弘	社現
社会科学	主任	豊田由貴夫	文史
	☆	栗田　和明	文史
		鈴木　秀一	経営
	☆	高木　恒一	社現
		橋本　博之	法法
	☆	髙橋　紘士	コミ福
自然科学	主任	柳町　朋樹	理物
		堀　　耕治	文心
	☆	藤井　昭雄	理数
		漆山　秋雄	理化
		栗原　謙二	理化
		上田　恵介	理生
	☆	町沢　静夫	コミ福
情報科学	主任	長島　　忍	経営
		芳賀　　繁	文心
		内野　一樹	経会
		真島　恵介	理生
		岡太　彬訓	社産
		島田聡一郎	法法
		泉本　利章	観観
		小林　悦雄	コミ福
スポーツ健康科学	主任	濁川　孝志	コミ福
		大矢　達男	社社
	☆	安松　幹展	社社
		荒木　　汐	コミ福
		藤井　陽江	コミ福
		松尾　哲矢	コミ福
		沼澤　秀雄	コミ福

【言語教育科目担当部会】
部会長：山本　博聖

研究室名		氏　名	所属	
英　　語	主任	高山　一郎	経経	
	☆	P．アラム	経経	
		一ノ瀬和夫	経経	
		高橋　里美	経営	
		平賀　正子	社社	
		久米　昭元	社産	
	☆	東條　吉純	法国	
		野田　研一	観観	
		S.カズンズ	コミ福	
	☆	川﨑　晶子	コミ福	
	☆	小林　悦雄	コミ福	
ドイツ語	主任	小松　英樹	社社	
		竹原　創一	文キ	
		小島　康男	文独	
	☆	原　　克	文独	
		前田　良三	文独	
		郷　　正文	経経	
	☆	新野　守広	社産	
		斎藤松三郎	観観	
フランス語	主任	宇野　邦一	法法	
		原　　好男	文仏	
		細川　哲士	文仏	
		菅谷　憲興	文仏	
		山田真茂留	社社	
	☆	デルモンホサカ	法法	
		小倉　和子	観観	
		中島　弘二	コミ福	
スペイン語	主任	佐藤　邦彦	社産	
		野谷　文昭	法法	
		西田　　修	観観	
中　国　語	主任	細井　尚子	社社	
	☆	上田　　信	文史	
		谷野　典之	経営	
		舛谷　　鋭	社産	
諸　言　語	主任	山本　博聖	理物	※
日　本　語	主任	田中　　望	観観	
	☆	池田　伸子	経会	
		五十嵐暁郎	法政	

※言語部会長の兼務

全学共通カリキュラム運営センター　ＮＥＷＳ

新しい履修登録方法の説明会について

・２００３年度から全学共通カリキュラムの一部を対象として、授業開始日以前にＷｅｂ上で履修登録を行う制度がスタートします。
・対象となる科目は、履修者が非常に多くなることが予想される科目です。
・これらの科目には、予め定員が定められており、履修希望者が多かった場合は、抽選による履修者の制限を行います。
・この制度についての説明会を下記の通り開催します。

池袋キャンパス
日時　２００２年１２月１３日（金）１８時～
場所　８１０１教室

武蔵野新座キャンパス
日時　２００３年１月中旬
場所　未定

２００１年度の主な活動

＜全カリ運営センター＞

11/29 シンポジウム「学生が語る全カリ～内から見た全カリ・外から見た全カリ」
シンポジスト：金治さやか（日本女子大学学生）
五十嵐大輔（立教大学学生）
白男川智子（早稲田大学学生）
挟間　彩子（立教大学学生）
司　　会　坂倉　裕治（立教大学文学部助教授）

＜総合部会＞

12/4　ワークショップ「全カリと専門のあいだ～全カリの授業を担当して～」
報告　西原廉太（人文科学研究室主任）、星野宏美（人文科学研究室室員）、橋本博之（社会科学研究室室員）、鈴木秀一（社会科学研究室室員）、柴崎徳明（自然科学科目担当者）、堀　耕治（自然科学研究室室員）、長島　忍（情報科学研究室主任）、沼澤秀雄（スポーツ健康科学研究室室員）
司会　服部孝章（社会学部運営委員）、吉岡知哉（社会科学研究室主任）

全カリホームページリニューアル

昨年度開設された全カリホームページが、このほど、新たなコンテンツを加えてリニューアルされました。
主な内容は以下の通りです。

URL http://www.rikkyo.ne.jp/~z3000064/

＜全カリって何？＞
・全カリのめざすもの
・全カリの歴史
・全カリ部長からのメッセージ
・全カリ運営センターのしくみ

＜カリキュラム>
・カリキュラムの組み立て
・言語教育科目について
・総合教育科目について
・授業レポート

＜教育研究室のページ＞
・研究室一覧

＜メンバーと委員会＞
・全カリ運営センターメンバー一覧
・委員会日程
・議事録

＜刊行物＞
・ニューズレター
・大学教育研究フォーラム
・「全カリのすべて」
・自己点検評価

全カリニューズレター　No.17
印　刷　2002.11.25　　発　行　2002.11.30
発行人　庄司　洋子
編集人　林　もも子／是永　論／大橋　健一
発行所　立教大学
全学共通カリキュラム運営センター
印　刷　神谷印刷株式会社